

# 発達支援リーフレット

相談・訪問・支援会議・研修会などのシーンでしばしば話題になるテーマのヒント集

今般、療育コーディネーターが、電話・メール・来所等で相談を受けたり、学校・園等に訪問したりした際に、しばしば話題になるテーマについて、課題解決のヒントとなるような情報を、図やイラストなどの視覚的情報を添えて端的にまとめ、リーフレットにしました。

これらのリーフレットは、子どもの発達にかかわる保健・子育て・保育・教育・医療・福祉などの分野で、日々子どもと接して生活したり支援に当たったりしている皆様(保護者、支援者、園・学校・施設職員等)に、簡便な形で情報提供することを目的としています。

従いまして、必ずしも専門的な知識がなくとも、一般的な知識に基づいて理解しやすいように、図やイラストや説明文の表現を工夫しながら、作成いたしました。無償で配布・提供させていただくものですので、お気軽にご利用いただければ幸いです。

No.	タイトル (サブタイトル)	主な内容 (キーワード)	対象年齢 (年代)
①	コミュニケーション発達を見守る ～三項関係成立のプロセスをたどって～	二項関係 濃厚な二項関係 うっすら三項関係 三項関係 パラレルトーク 指さしトーク	0～3歳 乳幼児期
②	ことばの相談に見る状態像から ～就学前後の子どもの発音・発話について～	幼児語的な発音 晩熟型 こもったような発音 不器用型 話す・聞く等の困難 吃音	4～8歳 就学前後
③	行動を変えるための鍵を見出す ～環境→考え方→行動の波及を想定して～	「信・頼」関係 トロッコモデル 支点・力点・作用点 てこモデル 心的バリアフリー 可視化	3～18歳 幼児期～青年期
④	こだわりの向こうに未来を描く ～意識の転換から個性の伸長を目指して～	泥沼モデル 本当の願い 遊び場 逃げ場 受け流す・切り替える まっとうな心根 よた話・あす話	3～18歳 幼児期～青年期
⑤	心の決めたままに我が道を ～意思決定を支えるやり取りを通して～	眼ざし・手ざし・指さし AAC 意思疎通支援 意思のバクトル 約束を守るための支援のサイクル	3～18歳 幼児期～青年期
⑥	肯定的自己像が人生の道しるべ ～自分探しの旅路に生きがい求めて～	ICF 環境因子 個人因子 ライフスタイルの形成 人生設計 悪行・無業・正業 社会資源	10～18歳 思春期・青年期
⑦	好循環の原動力となる意欲の源 ～かかわりの中で癒され満たされる体験～	意欲→成功→自信 悪循環 好循環 保養(癒される) 充足(満たされる) 生活環境を超えた非日常世界 岬モデル	0～18歳 乳幼児期～青年期

これらのリーフレットは、紙文書、または、電子ファイル(PDFファイル)で提供させていただきます。コピー・印刷による複製、及び、配布は、ご自由にしていただいても結構ですが、原則として、表紙下部の執筆者・連絡先はそのまま、ご利用いただきますようお願いいたします。

児童発達支援センター  
にじいろキッズらいふ HP

事業案内 > 児童発達相談  
センター/サービス内容 >  
療育コーディネーターより  
ダウンロード可



【問い合わせ・連絡先】

長野圏域療育コーディネーター／言語聴覚士  
安川 健治

〒380-0928 長野県長野市若里 6-6-14  
児童発達支援センター にじいろキッズらいふ

TEL 026-219-3781 業務携帯 080-8877-1709  
E-mail k-yasukawa@nagano-shajikyō.or.jp

➤ キーパーソンとなる人は？...トロッコモデル

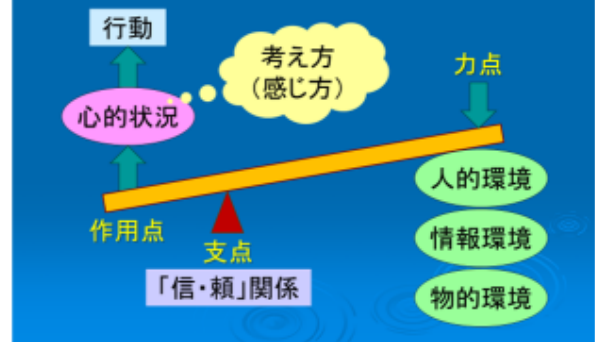
◇ 子どもにとってキーパーソンとなる人の見極め



1. キーパーソンとは、子どもにとって、役に立てると感じられる「いい人」で、言い換えれば、頼れる大人。
  2. キーパーソンは、その子どもがまっとうな心根を持っていることを理解した上で、「いい子」だと信じられる大人でもある。
  3. キーパーソンである大人と子どもとの関係は、信ずる者と頼る者という関係で、「信・頼」関係とすることが出来る。
  4. 両者の関係は、メリットを提供する者とされる者という関係で、対等ではなく、大人の側の、「お手並み拝見」という余裕も大事。
- 谷を隔てた二つ山という距離感と両者の高低差を、橋を下る「トロッコ」で表している。

➤ 働きかけるポイントはどこか？...てこモデル

◇ 実際に働きかけるポイントを明確にするために



1. 子どもの「行動」を変えるためには、それを引き起こしている「考え方」、更には、そのもとになっている「環境」を変える必要があり、その点こそが働きかける「力点」となる。
  2. 支援者は、子どもの身近な環境に働きかけることで、間接的に「考え方」を変え、それによって、「行動」を変えることを目指す。
  3. こうして、「環境→考え方→行動」という形で、影響力の波及が生ずるように、環境を整備することが、「できる状況づくり」となる。
  4. そして、子どもの人的環境・情報環境・物的環境の整備を通して、心的状況を整えていく。
- このように、直接働きかけるべきは環境であることを、「てこ」の力点として表している。

※ 「③行動を変えるための鍵を見出す～環境→考え方→行動の波及を想定して～」の2・3ページより。



- ひとことに「こだわり」と言っても、いろいろな場面で、いろいろな形を取って、表現されます。上のイラストは、しばしば見られる行動の例です。
- 「こだわり」行動の最中、子どもの表情を見ると、へらへら笑っている場合もありますが、あまり楽しそうでなく、むしろ苦しそうな場合が多くあります。
- 子どもの本当の願に沿った行動というよりも、不安から逃れるために、暇つぶし、かりそめの遊び場、逃げ場として、機能している場合が多いようです。
- 「こだわり」行動が繰り返される場合、そこには持続させている要因があり、それは、往々にして身近な大人の反応です。
- 身近な大人が、叱責・禁止\*など強く反応すると、本人の混乱を招いたり、逆にご褒美になったりして、どちらにしても、「こだわり」行動をかえって強めてしまうことになります。

\* 叱責・禁止や強い口調の指示・命令ではなく、「～します。」と、するべきことを、終止形で端的かつ冷静に伝えることは有効です。



- 子どもの「こだわり」行動を、身近な大人が何とかなくそうと躍起になると、かえって強めてしまうので、「こだわり」にこだわらないことが極意です。
- 「こだわり」を減らそうとする「マイナス」の考え方ではなく、子どもにとって充実したよい時間を増やすという「プラス」の考え方こそが大事です。
- 「こだわり」行動そのものに対しては、つっぱってきたのをつっぱり返すのではなく、「暖簾に腕押し」、「柳に風」といった調子で、「受け流す\*」ことが得策です。
- その上で、「こだわり」の考え方から解放され「いいこと」を考えられるように、次のページに示すような、考え方を「切り替える」のよい話題へと誘い、意識の転換を図りましょう。

\* 「受け流す」ときには、肯定や共感ではなく、まして拒否でもなく、中立的に「そうだね～」というように、平気で横に流れるような態度で応ずることが有効です。また、悪態に対しては、子どものまっとうな心根を信じて、「また心にもないことを」と応じます。

※ 「④こだわりの向こうに未来を描く～意識の転換から個性の伸長を目指して～」の2・3ページより。

